アイデンティティの相対化
―フィンキェルクロート『想像のユダヤ人』におけるユダヤ人性の問題―

田　所　光　男

はじめに

1950年代に入り、いわゆるフランス語表現のユダヤ人文学が社会の注目を集めるようになる。「苦しみの中で成熟した」と評されるように、この動きの担い手となったアンドレ・シュヴァルツ－バール、アンナ・ランフュス、それにマネス・スペルベール、エリ・ヴィゼールなど（Wardi 21）は皆、ナチズムによるユダヤ人迫害の直接の犠牲者であった。これに対し、アラン・フィンキェルクロート（Alain Finkielkraut, 1949-）の『想像のユダヤ人』（*Le Juif imaginaire*, 1980）は、こうした世代の後に来る、自分たち戦後のフランスに生まれ育ったユダヤ人の肖像を描き出す。前稿で検討したように[1]、同化を目指したイスラエリットから距離をとってこの世代はユダヤ人差異を主張した。そしてその差異の核心は、ユダヤ民族の伝統的な宗教とか生活習慣などの文化的な固有性にではなく、ジェノサイドの犠牲という事態に置かれていた。他者による拒否という次元でユダヤ人性を把握するこうしたやり方には、ジャン－ポール・サルトルの『ユダヤ人問題についての考察』が確固とした座標を提供している[2]が、戦後世代がたとえどれほど声高に「アウシュヴィッツの子」というアイデンティティを叫ぼうとも、自分たち自身は、事後に生まれた、いわば間接の犠牲者に他ならない。「現実の危険に身をさらすことなしに、私は英雄の身の丈をもっていた」（*Le Juif* 13-14）。このように口をあけた後ろめたい意識は広がって、フィンキェルクロートは次第にユダヤ人差異の主張を離れて行く。それは、ショアー（Shoah）という希有の悲劇を次代の人がどのように受け継ぐべきなのか、また受け継ぐことができるのかという模索であり、フィンキェルクロートはこうして記憶の仕事の意義を発見して行く。

もちろん、戦後のフランス語ユダヤ人文学においてはフィンキェルクロートの登場を待つまでもなく、記憶は主題の面でも素材の面でも主要な位置を占めてきたと言える[3]。その中で、フィンキェルクロートの思索の特色は、自己の確立とか自己の実現などを価値とする言説を、記憶を通して乗り越えて行こうとするところに求められるように思う。『想像のユダヤ人』における差異の主張から記憶の仕事への変貌の最も深いレヴェルは、自己に専心する論理の相対化に置かれているのである。「名高き、差異への権利は、解放というその外観の下に、狡猾な拘束を隠している。すなわち、自己とアイデンティティ

という言葉でジュダイスム（judaïsme）を考えなければならない義務である」（215）。一見非常に異なる二人のユダヤ人、ピエール・ゴルドマン（Pierre Goldman）とエマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Lévinas）に強い影響を受けつつ、フィンキェルクロートは、現代世界一般を強く縛りつけるこの種の「狡猾な拘束」から自由になろうと試みる。この著作の興味はこうしてユダヤ人論の領域を越えてくる。

１　想像の革命家と想像のユダヤ人

「われわれはみなドイツ系ユダヤ人だ」― 68年５月の反乱のさなか、学生リーダーの一人ダニエル・コン－ベンディットが国外退去になったことに抗議して、デモ隊は彼に対する連帯をシュプレヒコールする。それに自ら声を合わせながら、フィンキェルクロートはそうした連帯にユダヤ人として「感謝」を感じていた一方、その「あまりに容易であまりに騒がしい」連帯が、ユダヤ人性の簒奪のように思われて苛立ちも覚えていたという（*Le Juif* 26）。しかし、ただ一度デモの時だけユダヤ人になりすまして平気な彼らを簒奪者と非難する自分は、ただ日々変装を脱ぐ必要がないだけで、いったい彼らとどこが違うのであろうか。フィンキェルクロートの中で、ジェノサイドの犠牲者に一体化する、これまでのユダヤ人差異の主張に対する疑いがこの時明瞭に意識されたようである。この疑いは成長して行く。そしてそれに強い影響を与えたのはＰ・ゴルドマンである。

ゴルドマンもまた、同じシュプレヒコールを聞いていた。しかし彼の場合、「馬鹿野郎、そんなもんにもなりたいのか！」（Goldman 70）と、ただ苛立ちだけを感じている。ユダヤ人の一人としてやはり心を揺さぶられてもおかしくはなかったのに、ゴルドマンはこうした連帯を拒否している。

ゴルドマンのことは一般には今ではほとんど忘れられてしまっているように見える[4]。しかし、1979年９月20日、パリで彼が何者かに射殺された翌日、新聞『ル・モンド』はその事件を第一面で報じている。そしてその記事はこの被害者にまつわる関心どころとして、彼は74年、三件の強盗と二人の殺害の罪により終身刑を宣告されたものの、殺人については無実を主張し続け、76年５月再審によりその件については無罪が認められて、ほどなくして自由の身となっていたことを示している（*Le Monde*）。しかし、ゴルドマンにまつわる社会的関心はこのような裁判上の逆転劇に限られるものではなかった。

ゴルドマンは1944年６月占領下のフランスに生まれている。両親はポーランド系ユダヤ人で、当時は二人とも共産党系のユダヤ人レジスタンス組織の活動家であった。63年ソルボンヌに登録。以後共産主義学生連合などに加わって、政治闘争に入った。初審の起訴状によれば、ゴルドマンは68年５月の反乱に関わっている（Goldman 11）。68年から

69年にかけてヴェネズエラのゲリラ組織に加わり、後、帰国して、逮捕のきっかけとなった犯罪を行なった。世間は極左の活動家から強盗殺人犯へという、68年世代の転落に関心をもったのである（*Le Juif* 35）[5]。

ゴルドマンが裁判にかけられた時、このように、断罪する側はもちろん、彼を弁護する側にも、68年世代全体が裁かれるのだ、とする論調が強くあったらしい。しかし、ゴルドマンはそれに対してきっぱりと異議を唱えている。「私は本質的に68年５月の子とは正反対であった（中略）。私のことを理解するには私の政治的な世代とのこの差異、この分裂を理解しなければならなかった」（Goldman 241）。いわゆるノンポリが闘争のこちら側に留まっていたとしたら、ゴルドマンは向こう側にいて、同世代の反乱に「淫らな香り」をかぎとっていた。「［学生たちは］自分たちが暴力の中に、反乱の中にいるように思い込んでいたが、彼らが投げつけているのは敷石であって、手榴弾ではない」。こういう「遊戯」の中の学生たちに本格的な武力闘争を展開するように勧めて、相手にされなかったゴルドマンには、68年５月の騒ぎは「集団的なオナニー」でしかなかった（70）。

> 彼らが想像を権力の座に据えるのに私はショックを受けた。その権力奪取とは、想像上の権力奪取であった。（70）

学生たちは自分の「想像」の中でのみ、革命家なのである。ゴルドマンは〈想像の革命家〉たちの大はしゃぎするパリを去って、ヴェネズエラでゲリラとなる。

ゴルドマンの嫌悪を通して明らかになるこのような〈想像の革命家〉の姿は、フィンキェルクロートが、ユダヤ人差異の主張に対して明確な批判を形づくるのに役立っている。前稿で検討したように、「アウシュヴィッツの子」という「見出された差異」は、他者による拒否の極みとしてのジェノサイドの犠牲ということを内容の核心にもっていた。確かにこの限りでは、サルトルによるユダヤ人定義があてはまる。しかし、ジェノサイドのトラウマのために反ユダヤ主義が首を持ち上げることができない環境の中に育った戦後世代は、反ユダヤ主義的迫害や差別を直接受けた経験はほとんどない。自分たちはただ想像の中でユダヤ同胞の苦難に自己同一化して、そのようにして得られるユダヤ人というアイデンティティを「ブローチ」（121）のように飾っている「想像のユダヤ人」（23）ではないのか。そのユダヤ人差異には中身がなく、その主張は「無のひけらかし」（103）にすぎない。

ところで、フィンキェルクロートは「想像のユダヤ人」という言葉によって、単に戦後生まれのユダヤ人を理解するばかりではなく、そのユダヤ人を含む68年世代全体を把握する。この「経済成長の子供たち」（30）は、想像の中でドイツ系ユダヤ人にだけ一

体化しようとしたのではなく、第三世界の非抑圧者たちを次々と体現していったという(43)。「自己同一化ということを、世界への自分の関係のほとんど唯一の様態としたのは、一つの時代全体なのである」(29-30)。

２　限りない負債

ゴルドマンがたとえ自らどれほど68年世代と異なることを強調しようとも、彼の生の軌跡はやはりこの政治的な世代全体の波形を基本形として、その振幅をいっそう過激にしたものと言わなければなるまい。チェ・ゲバラのようなラテン・アメリカのゲリラの英雄に想像によって自己同一化したのが68年世代なら、実際にヴェネズエラに行って、そこのゲリラ組織に身を投じたのがゴルドマンである[6]。マルコムＸなどを通してアメリカの黒人に想像によって一体化したのが68年世代なら、パリの黒人に暴力を手ほどきして彼らと強盗をはたらき、黒人との深い交感の瞬間を犯罪の最中にもてたことを獄中で一人かみしめているのがゴルドマンである（Goldman 125)。西欧・白人・戦後に対して居心地の悪さを感じていた68年世代の、ゴルドマンはその極形である。

それではそうした生の波形の違いはどこから来たのであろうか。ゴルドマンは同世代と同じように、大文字の「歴史」、すなわちレジスタンスと革命の夢を追いかけている（*Le Juif* 34)。しかしその夢の形成のされた方は同じではないようである。彼らはジェノサイドやレジスタンスという歴史的事件の最中、ないしその直前・直後に生まれていて[7]、多くの場合それらに関して本を読んで得ただいたいの知識しかもっていない（35)。それに対し、「私はアウシュヴィッツの喚起の中で大きくなった」（Goldman 266）というゴルドマンにとって、「歴史」は自分の生に直結している。実際、その『フランスに生まれたポーランド系ユダヤ人の不分明な記憶』（*Souvenirs obscurs d'un Juif polonais né en France*, 1975）を読むと、ゴルドマンが、自分の生はそのはじまりから「歴史」に深く浸透されていたと意識していたことがよくわかる。

> 私はユダヤ人として死の危険の中に生まれた。戦う年齢にはなかったが、生まれるやいなやポーランドの死体焼却炉の中で死に果てうる年齢にあった。まず殺害されたのは子供たちだったのだから。(27)

しかし、ゴルドマンは殺されなかった。彼は戦争中ワルシャワに生きていなかったことを「一種の原罪」のように感じ、自分の両親を含めてジェノサイドに抗した英雄たちにふさわしい生き方をしていないことを深く恥じていた（36)。ヴェネズエラのゲリラ闘争に現実に参加することはゴルドマンにとって、こうした矛盾を解決しようとする試

みであった。満足のいく活動もできず帰国した後の強盗は、どこに行っても消すことのできないその「原罪」に対する、どうやってもユダヤ人の名に値することのできない自分に対する罰なのであった（36-37）。また裁判中、弁明を行わず黙り続けたゴルドマンは、二人の殺害という濡れ衣を着せられて終身刑に処せられた時、この受難によってユダヤ人という名をもつ権利を見出したように感じた、という（38-39）。

ところで、いったいどうしてゴルドマンはその沈黙を破り、無実を訴える著作まで執筆するようになったのか。どうしてユダヤ人であることを名乗らせてくれる冤罪の中に留まらなかったのか。この点についてフィンキェルクロートはなんら問題にしてはいないが、獄中で執筆されたゴルドマンの著作は最後、意外な言葉で終わる。「自由の身になりたいという私の願いは主として或る女性への愛によって生まれている。この女性が私を生の中に立ち戻らせてくれたのである。私は生の中で彼女と再び一つになりたい。そうでなければ、永遠に獄につながれた無実という受難は私に完全にふさわしいものであったろう」（280）。この女性とは、本書ではKという名で示されている、アンチル諸島出身の黒人女性である。ヴェネズエラから戻ってパリで強盗を犯しつつあった時代に知り合った女性であり、終身刑が宣告された後、文通がはじまったという。「自分の過去の決定的な時期から不意に現れたこの女性への激しい愛に、ある夜、襲われた」（279）。もし結婚することがあればユダヤ人だと決めていた[8]ゴルドマンが、それにもかかわらず結婚を決意した女性である（279）。

ゴルドマンの著作は確かにジェノサイドとかレジスタンス、ユダヤ人とかフランス人、ポーランドやナチズム、父のこと、母のことが多く語られている。しかし、ゴルドマンの世界にはさらに別の空間が広がっている。それはカリブ海である。もちろんその全体に革命がみなぎっていて、ただ単に異文化に憧れたというのではないが、キューバの音楽、ダンス、ラム酒、太陽などがそこではそれぞれ強烈な引力圏を構成している。パリにいる時でも、ゴルドマンはユダヤ人街よりもアンチル諸島出身者たちの居住する地区やバーに出入りしている。またしばしば言及してきたヴェネズエラ行もこの空間の中での旅であった。父と母が生まれ育ち、祖父母らがドイツ人に惨殺された土地ポーランドの円が、フランスの円を間にはさんで、カリブ海の円と連鎖する。これがゴルドマンの生死の展開する空間構成である。

しかしフィンキェルクロートの考察にはこのキューバを中心とする円がほとんど全く取り上げられていない。そしてこの欠落は、ゴルドマンの生と死、またその著作の中で何がフィンキェルクロートをとりわけ強く打ったのか、ということを明瞭に浮かび上がらせている。すなわち、ショアーの直後にフランスに生まれたユダヤ人としての罪と罰のあり方である。

私たちが自分の生を整えていたのにたいし、ゴルドマンはジェノサイドの受難者や生還者のもとで負った限りない負債を返済することに自分の生を捧げていたのであった。（*Le Juif* 41）

自分の民族と自分との間には隔たりがある。その隔たりを越えようとして、戦後世代の多くのユダヤ人は想像によって同胞に同一化しようとした。それは一見過去の重荷を自ら引き受けようとする身振りに見えるが、自分の日常的な生を破壊しつつ、冤罪を甘受するところまで「限りない負債」を背負うゴルドマンを鏡とする時、実のところそれは自分を飾るために、自分を充実させるために他の人たちの苦しみを利用しているにすぎないということが疑いえなくなる[9]。「ゴルドマンのおかげで、私は自分自身を裏切り、自分自身に背くことができるようになった。私はもう自分の差異に無邪気に固着しなくなった」（43）。

３　記憶に託されたもの

「想像のユダヤ人」フィンキェルクロートはゴルドマンというラディカルな抵抗を得て、ユダヤ人差異の主張が行き詰まることで、今度はユダヤ人世界とは切れて別の文化空間へとアイデンティティを求めて浮遊して行くわけではない。フィンキェルクロートにおいては、ユダヤ人であるとはどういうことかという問題意識が消えてしまうことは決してない。その一貫性はゴルドマンの場合と同じである。ゴルドマンという高い批判の求めてくることは、ユダヤ人性の捉え直しであり、そしてそこでもまた、ショアーが第一の問題である。「彼［ゴルドマン］の人生は唯一の、比類なきものであったが、不幸の継承者として振る舞ったり、迫害を口にしながら自分の家でくつろいだりしているのを彼が拒否したことは、すべての戦後ユダヤ人に関係がある」（42-43）。ゴルドマンを経過してユダヤ人性を捉え直すとは、ジェノサイドの犠牲者との関係を結び直すことなのである。

ユダヤ人性の中に実際に一つの強い要請があるとすれば、それは自己同一化の言葉ではなくて、記憶の言葉で考えられなければならない。（45）

「想像のユダヤ人」はすでに検討したようにジェノサイドの犠牲者と自分との間を、想像による自己同一化で結んできた。その橋がゴルドマンによって霧散させられてしまった時、そこに現れたのは向こう側との間にある「断絶」であり[10]（49）、その苦痛の意識とともに「記憶の命令」が生まれるという（51）。それは具体的には、ジェノサイ

ドの記憶であり、またジェノサイドによって消滅させられた、かつて中欧から東欧にかけて広がっていたイディッシュ世界の記憶である。

しかし記憶の仕事は、倦まずたゆまず史料を集め、それを博物館に陳列し本の中に記述すれば、それで済むわけではない。ジェノサイドの経験の記憶の難しさを明らかにするために、フィンキェルクロートはアウシュヴィッツからの生還者の一人プリモ・レヴィの一節を引用する。「私たちは、空腹、疲労、恐怖、苦痛、冬などと言うが、それは全く別のことである。こうした言葉は、自分の家で生きて、楽しんだり苦しんだりした自由な人たちによって創出された自由な言葉である」（*La réprobation* 164）[11]。つまり、ジェノサイドの経験を語るためには、日々の言葉は無力だと言うのである。実際アウシュヴィッツでは、銃殺される直前に人々はパンを求め、両手一杯のパンにむしゃぶりつきながら殺されていったという（164-165）。「私たちはこの絶対的欠乏を想像しえない。それは本能をだめにし、空腹を生よりも強くし、空腹がいやされる時には死を忘れさせる」（165）。ジェノサイドの経験は「伝達不可能」であり（*Le Juif* 45）、それを記憶することは、「考えられないことを考え抜く」（*La réprobation* 164）という一種のパラドクサルな行為になる。そしてそのためには、日々の思考や感情が断ち切られなければならない。

> 愛する人を失った後で、生活に再び適応するのになされる努力を形容して、精神分析は服喪の仕事という。私たちの努めは反対である。生活に適応するのではなく、むしろ脱適応しなければならない。そうしてこそ、私たちの中に、反省の場所、生にもかかわらず、心配や幸福にもかかわらず、私たちがショアーについて考えることができる空間が残り、また残り続ける。（*La réprobation* 163）

「想像のユダヤ人」はジェノサイドの犠牲者に自己同一化して自分のアイデンティティを作り出す以上、当然、死者は私たちの中に生きていると言うであろう。しかし戦後の「日常性の文化」に適応した自分たちは、結局のところ死者なしで生きることに成功していると言わなければなるまい（163）。ゴルドマンのような人こそがこの「脱適応」の努めを徹底したのであり、フィンキェルクロートはこの同じ努めに、ショアーの記憶を託すのである。こうした記憶の仕事は戦後の時間にラディカルに対立し、絶えずその常識を批判することになるであろう。

イディッシュ世界の記憶もまた同じことである。1948年の建国以来、イスラエル国家はシナゴーグや儀礼に取って代わるほどに戦後のユダヤ人の一体性を支える最も強力な要素となった（Azria 98）。このような「イスラエルの中心性」（*Le Juif* 176）が確定してくるにつれて、当然のことながら、既に存在としてはほとんど消滅してしまったイディッシュ文化などは、脇に追いやられてしまう。また、同化においてジュダイスムは私的領

域の信仰に還元されてしまったが、イスラエル国家の存在によって今度は、政治、とりわけ国民国家に閉じ込められてしまう。どちらもジュダイスムを透明化しようとするが、その透明化の基準は「近代的理性」の据えた公－私、政治－宗教という基準なのである（204）。記憶によってフィンキェルクロートが維持しようとするイディッシュカイト（Yiddishkeit）とは、言語、習慣、信仰、政治、ものの考え方、人間関係などを全体として含む「一つの文化的世界」（123）なのである。

他方この世界は、戦後、時間の経過とともに、マジョリティの記憶の中で特別な「歪曲」を被り始めた（55）。それによれば、戦前のヨーロッパにいたユダヤ人は、西欧の近代的なユダヤ人と東欧の中世的なユダヤ人で、後者は時代の進歩に取り残された過去の宗教的な遺物であり、たとえジェノサイドがなかったとしても、遅かれ早かれ消滅せざるをえなかったものだ、ということになる。そして、こうしたステレオ・タイプは、ナチズムに対してほとんど抵抗らしいこともせずに殺されていったユダヤ人に対する侮蔑につながっていた。アウシュヴィッツはナチズムの恐怖を証言するというよりはむしろ、どうしてユダヤ人はあれほど無抵抗に殺されたのかという好奇心の焦点になったという（157）。フィンキェルクロートは、忘却以上にひどいこうした「神話」（56）に対して抵抗することも記憶に求める。「名誉回復の務めが私たちに課せられている（中略）。ユダヤ人の記憶はマジョリティの記憶に対する絶えまない戦い以外の何物でもない。ジェノサイドの死者たちを取り押さえて、これらは同意して処刑された間抜けな者たちなのだと後世に伝えようとする大勢順応主義から、死者たちを引き離さなければならない」（57）。

４　アイデンティティから超越へ

以上検討してきたように、記憶に託された内容は少なくない。しかしそれにしても、「記憶」が「自己同一化」と対照されていたことの違和感は依然として残る。この二つの言葉は通常同じ次元には並ばないからである。この対照をよく理解するには、フィンキェルクロートが疎外論について述べていることを見なければならない。

フィンキェルクロートによれば、現代の様々な精神的問題の原因を要約するのに、「疎外」（aliénation）という言葉がよく用いられるという。これは当時のいわば時代の言葉なのであり、その語る筋書きは、父や母、システムや社会などが自己の内部に入り込んで、この内なる異物が自己を抑えつけているので、これを排除して十全たる自己になろう、というものである（115）。こうした疎外論は、自己と他者との関係についてのある特定の理解に基づいている。他者の視線によって自己が客体化されて、しかもその内容に対して自己は何もできない。その視線が作り出し、押し付けてくる像の下で自己は窒息し

てしまう。他者の視線とはだから自己に対する圧制である。フィンキェルクロートは後の著作『愛の知恵』（*La sagesse de l'amour*, 1984）の中で、このような他者の視線の暴力をサルトルの『存在と無』に従って説明している（25-28）。あの、マジョリティの差し向ける拒否がユダヤ人を作り出すというサルトルのユダヤ人定義をここで思い出してみるなら、サルトルがこの他者の視線の圧制ということをユダヤ人問題に適用したことは明らかであろう。サルトルのユダヤ人定義とはフィンキェルクロートによれば要するに疎外論にほかならない。そして、フィンキェルクロートはまさにこの、自己疎外とその克服という筋書きに就き従うことが難しくなってしまった。というのは、この「現代のモラル」が、「自己であること、ただ自己であることの中に、苦痛や倦怠がありうる」ことを見ていないからである（*Le Juif* 115-116）。『愛の知恵』の中で、フィンキェルクロートはリトアニア出身のユダヤ人Ｅ・レヴィナスの哲学の示す、サルトルとは別の自他関係理解を踏まえて次のように書いている。

> 自己であること、自己を見出すこと、外来の諸悪から自己を純化すること、このような願い以上に、おそらくもっと深くもっと決定的なものがある。それは、自分の自己から離脱する夢、自己自身への還帰という運命から逃れる夢である。（25）

この「夢」が、自己同一化から記憶への転回において記憶に託された最も深い次元を示している。

「想像のユダヤ人」フィンキェルクロートは「日常性の文化」に同化して「自己－自己－自己の連続性」（*Le Juif* 116）の中で、ユダヤ人差異を主張していた。つまり、自己同一化（identification）によりユダヤ人同胞の悲劇に所属し、そのようにして自己の根底を固めて相手に対し自己を画したわけで、アイデンティティ（identité）としてユダヤ人性を生きていた。しかし、ゴルドマンという抵抗を経ることで、そういう行き方はジェノサイドやその犠牲者を自分のために利用しているにすぎないという批判に辿り着くことができた（43）。「私が本書で語ったことは、決別の物語である。私は自分のユダヤ人アイデンティティを通して自分自身を愛していたが、今日私はジュダイスムを愛している。それが自分の外から来るものであり、自分が含んでいる以上のものをもたらしてくれるからである」（212）。この「決別」は、言い換えれば、「自己と自己の偶像崇拝との敗北」（212）ということであり、これが、差異の主張から記憶の仕事への転回における根底的変化を成している。

> ジュダイスムは私にとってもはやアイデンティティというよりは、超越の形をもっている（212-213）

「超越」（transcendance）― それはすぐにイスラエルの神を思わせる。しかし、フィンキェルクロートはここで信仰への復帰を説くわけではない。彼の世代の多くは信仰から距離をとり、特に彼はジュダイスムをユダヤ教に還元してしまう傾向に強く反対している（202-203）。彼の言う超越ということをよく示しているのは、本書全体で何度か現れる負債と弁済という対概念である。前稿で見たように、フィンキェルクロートは同化主義に対し全体としては否定的であったが、自分たちを解放してくれたフランス人マジョリティに対して同化期のユダヤ人が「感謝の念」をもっていたことをポジティヴなものとして語っている（79）。解放に対するこの「感謝の念」は表面上の同化などには導かず、ユダヤ人は信仰だけを残して、それ以外の領域では「自分の存在に固執するあらゆる頑なさ」（92）をあきらめていったという。つまり「彼らは脱ユダヤ化することで彼らの負債を弁済したのであった[12]」（80）。また、負債と弁済の対概念はゴルドマンと、自分の生のことばかり考えている「想像のユダヤ人」との決定的な差異を把握する際にも現れていた。もう一度引いておこう。「私たちが自分の生を整えていたのに対し、ゴルドマンはジェノサイドの受難者や生還者のもとで負った限りない負債を弁済することに自分の生を捧げていた」（41）。以上いずれの場合においても、相手が倫理的な負債を課してきて、自己に固執する生のあり方に変更が求められている。ここにフィンキェルクロートの言う超越という関係の核心があろう。

> 自己に安らぐ主体は言葉なき責めにより窮する。（*Le Juif* 205）

これは『想像のユダヤ人』最終章のエピグラフとして掲げられている、レヴィナスの言葉である。超越の関係についての、抽象度を上げた表現だと思う。フィンキェルクロートの『愛の知恵』はレヴィナスの哲学に多くを学んだ著作であるが、その中で他者と自己とのこの超越関係がもう少し取っ付きやすい形で述べられている。

> 無縁な何か―他の人の顔―がやってきて、私は自分の無関心を断ち切らなければならなくなる。私は邪魔され、自分の生の酔いから醒まされ、自分の独断的な眠りから目覚まされ、自分の無実の王国を追われ、自分で選んだわけでも望んだわけでもない責任を他者の闖入によって課されてしまう。（*La sagesse* 142）

自分の外部に在って、自分とは関係のない、異質の他者が現れて来て、自分らしさをこの上なく大切にし、自分の存在を充実させて行こうと努めている私、要するにアイデンティティの論理を生きる私を打ち砕く形で「責任」を課してくる。これが超越の関係であると思う。

「想像のユダヤ人」フィンキェルクロートは明らかに「自己に安らぐ主体」である。それでは、そういうエゴチストに「言葉なき責め」を投げてくる超越的他者とは、この場合誰なのであろうか。それは、ジェノサイドの犠牲者たちや、イディッシュ世界に生きていた人々、それにとりわけ、ジェノサイドから生き残り、しかもかつてイディッシュ世界に呼吸していた、そしていずれ確実に消えて行くであろう自分の両親に他ならない（*Le Juif* 216）。フィンキェルクロートにとって、ジュダイスムはいまやこうした様々な「人の顔」をもった他者であり、それは血のつながりによってアイデンティティを託することのできる、そうして深々とした安らぎを与えてもらえるような母胎なのではなく、そういう自然的な関係を越えた他者なのである。「想像のユダヤ人」の、差異主義という名の自己主義は、ゴルドマンという断固とした、能弁な抵抗に出会う前から、こうした他者たちの「言葉なき責め」に負債を感じ続けてきたのだと思う。そして記憶はそれに対する弁済責任の履行の形に他ならない。

結び

前稿及び本稿で検討してきたように、フィンキェルクロートの『想像のユダヤ人』は全体として、差異の主張から記憶の仕事へという変貌を物語る著作であった。この変貌過程全体を通じて一貫して認められるのは、もちろん過去の重みである。「アウシュヴィッツの子」という空虚な差異の主張であろうが、現在の時間に「脱適応」しつつジェノサイドを考え抜く記憶の仕事であろうが、いずれの場合にしても、ユダヤ人であるということは、この過去の悲劇との関係の中で考えられている。しかし、このような関係それ自体は、ショアー後に生きる多くのユダヤ人、とりわけアシュケナージーム系ユダヤ人の間では、頻繁に見られるものである。その中でフィンキェルクロートの思索の興味深い点は、本稿で検討してきたように、自分のアイデンティティの内容を批判するばかりではなく、アイデンティティという考え方それ自体を問題化するところにあると思う。『想像のユダヤ人』は、フランスのユダヤ人の戦後の動向を考察する研究によってしばしば言及され、また参考文献の中に入れられている（例えば、Azria 120; Benayoun 271-272; Dayan-Rosenman 336; Wieviorka, A. 381; Wieviorka, M. 281）。しかし、主として歴史学や社会学の分野でなされるそうした研究は、『想像のユダヤ人』の目指すこのアイデンティティ批判の方向をほとんど取り上げることができていない。

差異の主張がアイデンティティの論理に立っていたのに対して、記憶は超越の倫理に支えられている。フィンキェルクロートは『愛の知恵』の中でレヴィナスを踏まえて、すでに検討したような他者と自己との対面関係は、神と被造物の関係を転移したものに他ならないと述べている（124）が、これを傍証とするまでもなく、フィンキェルクロー

トの考える超越の倫理がジュダイスムの根源的な倫理に汲むものであることは明らかである。フランスのユダヤ人の間では、多くの研究者が指摘するように、70年代以降、信仰を含めユダヤ固有の文化への回帰が顕著になる（Birnbaum 206-207; Azria 99-102）。フィンキェルクロートが記憶の仕事の根底に超越の倫理を据えたことも、大きく見れば、確かにそういうユダヤ的なものの再生という文脈の中で捉えられることであろう。

しかし、フィンキェルクロートはこのようにしてユダヤ的伝統の内側にアイデンティティを確保するのだと言うのであれば、それは正しくあるまい。この超越の倫理は、相手にこちらとの同一性を強制する同化主義であれ、自己の特殊性に立て籠もる差異主義であれ、フィンキェルクロートの引用したレヴィナスの言葉を再び引用するならば、どのような「自己に安らぐ主体」をも揺さぶり起こさずにはいないであろう。もはやユダヤ人という自己に安定を見出すことはできないのである。

注

1．　本稿は、「フィンキェルクロート『想像のユダヤ人』における「見出された差異」―ジェノサイド後のフランスでのユダヤ人性の追求とサルトル―」の続編である。

2．　この点については前稿を参照していただきたい。また、パリ解放直後に執筆されたこの著作以降における、ユダヤ人問題に対するサルトルの態度については次の解説が参考になる。Henri Raczymow《Sartre et la question juive.》

3．　戦後のフランス語ユダヤ人作家における記憶の問題については、Ｃ・レヴィ『アイデンティティのエクリチュール』、とりわけその第１部第１章「記憶の場所」が多くの情報を与えてくれる（Levy）。

4．　しかし、予期しないところでＰ・ゴルドマンの名に出会っている人も多いかもしれない。歌手・作詞家・作曲家としてフランスできわめて人気の高いジャン－ジャック・ゴルドマン（Jean-Jacques Goldman, 1951-）についてインターネットで情報を得ようとする時、いくつかのサイトにある彼の「経歴」（Biographie）をクリックすると、７歳年上の異母兄弟としてピエールの存在を知ることになる。特に、Ｊ－Ｍ・フォンテーヌによるものは、主にＰ・ゴルドマンの著作に基づいてジャン－ジャックの「ルーツ」を示して、そこでは父母以上に、この兄の生涯が詳しく語られている（Fontaine）。

「ゴルドマン世代」という言葉が作られたほど、ジャン－ジャックは一つの世代の代弁者とみなされる。それは、失業に脅える「危機の世代」である（Alia）。それに対し、これから見て行くように、兄ピエールは反抗の世代の象徴的存在であった。戦後のフランス社会におけるユダヤ人の歩みを考察する研究にとって、この二人の兄弟の足跡は欠かせないものであろう。

5．　ゴルドマンが殺害されてほぼ一年後にフィンキェルクロートの『想像のユダヤ人』は刊行されていて、そこでは彼の死がフランス社会の中に引き起こした反応までが考察の範囲に入っている。

6．　「カルチエ・ラタンはラテン・アメリカに憑かれている」（Hamon and Rotman 384）と言われるように、ゴルドマンが一人異質なわけではない。特に、Ｗ・ラビも指摘するように（Rabi

618)、ミシェル・フィルク(Michèle Firk)の行跡はゴルドマンのそれと重なるところが多い。1937年ポーランド系ユダヤ人の子供として生まれた彼女はユダヤ人迫害を経験している（その直接の記憶をもっていた点はゴルドマンと異なる)。共産党への入党、キューバ滞在、そして68年５月、学生反乱のパリを去ってグァテマラのゲリラ組織に入る。69年９月、拷問によって仲間を裏切ってしまうことを恐れて、逮捕前に口の中に拳銃を発射して自殺（Auron 50-51; 65)。

７．　一口に68年世代と言っても、それはきわめて多様な集団であり、何通りものカテゴリー化の方法があろう。Y・アウロンは『68年５月の極左ユダヤ人』の中で、68年世代に所属したユダヤ人を大きく二つに分けている。一つは、1930年代の終わりから大戦中に生まれた「戦争の子供たち」。もう一つは、戦後、50年代の初めまでに生まれた「生還者の子供たち」である。前者はユダヤ人迫害の直接の記憶をもち、アルジェリア戦争に反対する中でまず自分たちの政治意識を形成した世代であり、後者は直接には戦争を知らず、また68年の学生反乱が政治的に態度表明する初めての機会となった世代である。そして著者は、ゴルドマンを前者に、フィンキェルクロートを後者に分類している（Auron 第１部)。

８．　文化的にかなり同化が進んでいるにもかかわらず、異教徒との結婚に対する抵抗感は、戦後のフランスのユダヤ人の間にかなり広まっている（Schnapper 229)。

９．　フィンキェルクロートは自己同一化の欺瞞という考えを、1998年に結審したモーリス・パポン裁判に際しての論説においても展開し、Ｓ・クラルスフェルド（フランス・ユダヤ人強制収容者の息子と娘協会会長）の行なう「犠牲者への自己同一化」を厳しく批判している（《Serge Klarsfeld》)。

　また、68年世代の行なう、想像による自己同一化に対するゴルドマンの嫌悪については、H・シクスーも注目して次のように指摘している。「自己同一化が、盗んだり裏切ったりすることになったり、抹殺とさほど違わない一種の抑圧になったりする時もある」（Cixous 64)。

10.　この「断絶」の確認は、後の著作『イスラエル糾弾』（*La réprobation d'Israël*, 1983）においても明確に据えられている。「ユダヤ人の試練に対して、私は本を読むことと話を聞くこと以外の関係をもっていない。ジェノサイドは私の感受性に刻印を残したものの、私を苦しみからは守ってくれたから、それだけいっそう私はこの隔たりを忘れたくないのである。忠実さが簒奪に転落しないように、生還者の言葉とその子供たちの言葉との間にある不連続性を守らなければならない」(162)。まさにその「隔たり」を忘れてしまったのが「想像のユダヤ人」であろう。

11.　記憶に関しては『想像のユダヤ人』の中に分散して書かれており、また必ずしも明確化されているとは言えない。本書で生まれはじめた内容が後の著作の中でいっそうはっきりとした姿をとっているので、ここでは『イスラエル糾弾』からも引用したい。

12.　同化期のユダヤ人が、フランス・マジョリティに対して負債を負っているという意識を抱いていたことの指摘は突飛なものではなく、実際、「子としての負債」という概念が第二帝政以降、第三共和制の末までラビの説教や演説の中で使われてきたというし（Landau 17-18; 20)、また人民戦線内閣の首相を務めたユダヤ人レオン・ブルムも同じような負債の念、感謝の念を明瞭に述べている（Colton 20)。

引用文献

Alia, Josette. 《La génération Goldman.》 *Le Nouvel Observateur*. N°1213. 5-11 février 1988.

Auron, Yaïr. *Les Juifs d'extrême gauche en mai 68. Une génération révolutionnaire marquée par la Shoah*. Trans. Katherine Werchowski. Albin Michel, 1998.

Azria, Régine. *Le judaïsme*. La Découverte, 1996.

Benayoun, Chantal. 《La question d'une politique juive.》 *Histoire politique des Juifs de France*. Ed. Pierre Birnbaum. Presses de la fondation nationale des sciences politiques, 1990.

Birnbaum, Pierre. *Destins juifs. De la Révolution française à Carpentras*. Calmann-Lévy, 1995.

Cixous, Hélène. *Un K incompréhensible Pierre Goldman*. Christian Bourgois Éditeur, 1975.

Colton, Joël. *Léon Blum*. Trans. M.Matignon. Fayard, 1967.

Dayan-Rosenman, Anny. 《Mémoire, écriture, identité minoritaire.》 *Les Juifs de France. De la Révolution française à nos jours*. Ed. Jean-Jacques Becker and Annette Wieviorka. Linna Levi, 1998.

Finkielkraut, Alain. *Le Juif imaginaire*. Seuil, 1980.

id. *La réprobation d'Israël*. Denoël/Gonthier, 1983.

id. *La sagesse de l'amour*. Gallimard, 1984.

id. 《Serge Klarsfeld, le fou de la mémoire.》 *Le Monde*. 3 février 1998.

Fontaine, Jean-Michel. 《Biographie.》 *Parler d'sa vie*. http://jean-jacques.goldman.net.

Goldman, Pierre. *Souvenirs obscurs d'un Juif polonais né en France*. Seuil, 1975.

Hamon, Hervé, and Patrick Rotman. *Génération*. Vol. 1. Seuil, 1987.

Landau, Philippe. 《Religion et patrie: Les prières israélites pour la France.》 *Pardès*. N°14, 1991.

Lévy, Clara. *Écritures de l'identité. Les écrivains juifs après la Shoah*. Presses Universitaires de France, 1998.

Monde (Le). 21 septembre 1979.

Rabi, Wladimir. 《Pierre Goldman en prison. Notes et entretiens 1971.》 *Les Temps Modernes*. N°411. 1980.

Raczymow, Henri. 《Sartre et la question juive.》 *Les Juifs de France. De la Révolution française à nos jours*. op. cit.

Schnapper, Dominique. *Juifs et israélites*. Gallimard, 1980.

Wardi, Charlotte. *Le Juif dans le roman français 1933-1948*. A.-G. Nizet, 1973.

Wieviorka, Annette. 《Vers une communaute? Les Juifs en France depuis la guerre des Six-Jours.》 *Les Juifs de France. De la Révolution française à nos jours*. op. cit.

Wieviorka, Michel. 《Le Juif, figure de l'étranger?》 *Une société fragmentée*? *Le multiculturalisme en débat*. Ed. Michel Wieviorka. La Découverte, 1997.

田所光男 「フィンキェルクロート『想像のユダヤ人』における「見出された差異」―ジェノサイド後のフランスでのユダヤ人性の追求とサルトル―」名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科紀要『言語文化論集』、第 XXI 巻第１号、1999。